

川口琢司著

『ティムール帝国』

(講談社選書メチエ 570)

講談社 二〇一四・三刊
四六 二八六頁 一七五〇円

本書は、ティムール帝国(二三七〇〜一五〇七)の草創期の歴史を、創始者ティムール(二三三六?〜一四〇五)の生涯を通して概観したものである。ティムールは、チャガタイ・ウルスの権力が弱まり、各地に有力なアミールたちが割拠していた中央アジアを再び統一し、西アジアまで支配する広大な帝国を築いた。支持基盤を持たないティムールが、なぜ政権を樹立できたのか。精力的に行われた遠征の目的は何か、など、本書では各章の初めで様々な問いがたてられ、それを検証しながら、ティムールの実像に迫っていく。以下、簡単に本書の内容を紹介する。

第一章「稀代の英雄の登場」では、ティムールの出自やその出生をめぐる諸問題、そしてティムール帝国に大きな影響を与えたモンゴル帝国やチャガタイ・ウルスの歴史を概観する。第二章「創業の時代」はティムールの政権成立の要因を考察し、第三章「拡大の時代」では、ティムールの遠征の目的や、それを正当づけた論理を検証する。以上の過程で、ティムールはチンギス裔を傀儡の君主に擁立し、自身も婚姻によってハンの女婿(キユレゲン)となることで支配を正当化して、自身の威信を高めたことや、過去

の英雄たちの足跡を辿るように、次々に遠征を行い、領土拡大を目指したことが述べられる。

第四章「帝国揺籃の地マー・ワラー・アンナフル」は、帝国の中心となったマー・ワラー・アンナフルにおいて、遊牧民が季節移動する際の冬营地・夏营地がどのように選定されたかを扱う。第五章「帝都と首都圏」では、ティムールのバグ(庭園)造営から、都市建設におけるティムールの世界観を探る。

第六章「ティムールの死をめぐる」は、ティムール死後に行われた葬送儀礼、その後の後継者争い、そしてティムールの四男である第三代シャー・ルフ(二三七七〜一四四七)が政権を握るまでの過程を追う。第七章「もう一人の後継者」はシャー・ルフの息子である第四代ウルグ・ベグ(二三九四〜一四四九)を取り上げ、彼が祖父ティムールの遺志をどのように受け継いでいったのかに着目する。そして第八章「伝説のなかのティムール」では、ティムールの称号「サーヒブ・キラーン」や彼の系譜に注目し、後世に伝わるティムールの伝説がどのように作られたかを検討していく。本書の特徴は、ティムールの事績だけでなく、統治や征服活動における彼の意図や論理、ティムール死後に受け継がれた彼の遺志などにも注目している点であろう。「チンギス統原理」を尊重した政策や建築事業からは、テュルク・モンゴルの遊牧民の精神を受け継いだティムールの心性がうかがえる。その精神が、ティムールの死後、後継者たちにも受け継がれ、やがて宮廷史家たちによって、彼の存在が伝説化される過程が描かれている点も興味深い。本書は、ティムール帝国の初期史を知る手がかりとなるだけ

でなく、
タイムール自身のことを知るにも最適な入門書と言える
だろう。
(金谷真綾)